巻頭エッセイ

私たちは責任を果たせるか

斎藤栄二　Saito Eiji

Opening Essay

「知識が力そのものになる。南北問題の解決が最大の課題と考えるが，腕ずくの軍事や経済だけでは,答えを導き出せない。『知』がなければ，国際社会が成り立たない時代が到来しつつある。特に資源のない日本は『知』をもって国際競争力を得て，世界に貢献する以外に道はない。」

これは 2001 年にノーベル化学賞を受賞した野依良治氏の発言である（2005 年 1 月 1 日読売新聞）。私たちの年代は次のようなことを聞かされて育った。

「日本には石油などの自然資源がない。あるのは人間である。つまり人材だ。この人材を育てることによって，技術を発展させ世界に貢献していくのが日本に課せられた道である。」

戦後はこのフィロソフィーは確かに生きていた。町工場の中から生まれた本田やソニーは，世界の企業へと発展していった。ところがその人材育成が怪しくなってきている。人材育成を支える学力がついていない。2004 年の暮れ 12 月 8 日，各新聞は一斉に学力の国際比較について報道した。経済協力開発機構の国際学習到達度調査の結果の発表である。数学，科学，読解力の各分野にわたって日本の低落状況が目立った。

「人材だけが資源だ」と言ってきたその日本の資源が危うくなりつつある。自然の資源がない日本。だから人材育成が生命線であった日本。その人材育成が長期低落傾向の兆候を示しているとき，日本の将来はどうなるのであろうか。

今教育を考えるとすれば，一番大きな問題は将来に向けて次の世代を力ある国際人として育てておくということでなければならない。そういう広い視野から英語教育のあり方を考えることが，全ての英語教員に求められている。「国際理解」ということは，英語教育の分野ではよく議論される。ならば，私たち英語教員こそが広い視野と物事に対する本質的な理解を持つことが必要ではないか。

こういう状況のなかで，今私たちが直面している課題はなんであろうか。次の 3 つである。

1　英語の基礎学力を育成する。
2　英語を使う技能を育成する。
3　広い視野を育成する。

私は英語教育の流れをおよそ 40 年以上にわたって見てきた。川が流れるのと同じように，英語教育も一刻も休むことなく今日に至るまで流れ続けてきた。時にはゆったりと，時には急激に。今は激流である。そして時代は英語教育に対する期待をますます強めている。今や教育の世界全体にわたるキーワードは「自由化」の方向である。そういう状況のなかで，私たちの力の発揮が問われている。それは次の世代の育成につながっていく未来への責任を伴った仕事である。英語教育の場を通して力を合わせようとみなさんに呼びかけたい。

さいとう　えいじ
関西大学大学院外国語教育学研究科長。専門は英語教育学。現在の最大の関心事は基礎学力。著書に『より良い英語授業を目指して』（大修館書店），『基礎学力をつける英語の授業』（三省堂）ほか多数。

特集 基礎学力の育成

英語教育における基礎学力

高橋貞雄（玉川大学）

1．基礎・基本はなぜ重要か

平成 14 年に施行された外国語の学習指導要領の柱は「実践的コミュニケーション能力」の育成である。この目標を達成するために，言語の知識を身につけるだけでなく，場面に応じて適切に言語を運用することに重点が置かれるようになった。そのために授業においても，実際にことばのやりとりをするコミュニケーション活動が重視されるようになってきた。こうした傾向は，「『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想」および「同行動計画」によって，ますます拍車がかかっている。では，子どもたちの英語コミュニケーション能力は着実に向上しているのだろうか。最近になって，「学力不足」がクローズアップされたのはなぜだろうか。簡単にいえば，英語の力が思ったほどついていない，低下している，ということが明らかになってきたということではないだろうか。最近多くの自治体で，「ゆとり教育」から「学力重視教育」へ向けてさまざまな政策を講じる動きがある。たとえば，１年２学期制，習熟度別授業，少人数制授業などである。また，6・3・3 制の見直し，小学校の英語教育の取り組み，教育特区など，行政面からの教育改革も進んでいる。

では，英語教育についてはどう考えていけばよいのだろうか。とりわけ，本格的に英語教育（子どもたちの視点で言えば英語学習）に取り組むことになる中学校のあり方について，改めて考察してみたい。承知の通り，今回の学習指導要領において，英語は事実上の必修科目になっている。ということは，すべての生徒にとって必要な英語教育を行うということである。中学生は子どもから大人へと成長する過渡的な段階にあり，その多くが高等学校や高等教育へと進んでいく。この重要な発達段階にある中学生に対して，私たちは英語教育を通して何を保証すべきなのだろうか。

英語教育には，言うまでもなくさまざまな目的がある。たとえば，コミュニケーション能力の育成，メタ言語教育，異文化教育などである。そして忘れてはならないのは，英語教育は言語教育であるということである。言語教育はもちろん国語教育でも行うわけであるが，外国語教育としての英語教育も「ことばの教育」としての責任を担っている。国語教育とともに，英語教育を通して子どもたちの「言語力」を育成するという責任である。「言語力」は，他の教科においても，思考力という点においても，コミュニケーションという点においても根本的な能力である。

そこで当然の帰結として，英語教育を行う場合に英語の根本を，つまり基礎・基本をしっかりと教える必要があるということになる。英語の基礎・基本を学ぶということは，英語には日本語とは異なる「音」や「文法」のしくみがあること，コミュニケーションの仕方に違いがあること，といった根本を身につけることである。基礎・基本の学習を続けていけば，「基礎学力の向上」へとつながり，それはとりもなおさずコミュニケーション能力を高めることにつながる。コミュニケーション能力については 1980 年ころから盛んに研究が行われている。そのほとんどの研究において，コミュニケーション能力の要件の最初にあげられるのは「文法能力」である。もちろん，英語の文法もできるだけ自然な英語のやりとりを通して身につけるのに越したことはない。しかし，多くの中学生が置かれている環境は，週 3 時間での英語の学習である。この限られた状況では，しっかりとした「学習」や「気づき」を与えずして

基礎・基本が身につくとは思えない。つまり，基礎・基本の教育を行わずして「基礎学力」の保証はできない，ということである。

2．教科書で保証する基礎学力

教育は，教育を受ける主体である生徒，教育を行う教師，そして教育の素材となる教材の連携において成立する。ここでは「基礎学力」を保証するという観点から教科書で何ができるか，また何をすべきかという点において 2006（平成 18）年度版 *NEW CROWN*（以下，*18NC*）の考え方を述べておきたい。

使い古されているかもしれないが，「教科書を教えるのではなく，教科書で教えるのだ」という言葉がある。教科書はあくまでも教育の素材であり，教育のすべての責任を担うわけではない。しかし，教科書には題材から言語材料，言語活動にいたるまで編集者の教育観が反映している。当然，英語教育の基礎・基本をどう考えるか，という観点も教科書に反映している。*NEW CROWN* は従来から 4 技能のバランスを重視し，英語の基礎・基本を大切にしてきた。*18NC* においては「中学生に基礎学力を保証する」という観点から，あらためて英語の基礎・基本を点検し，その修得の方法まで踏み込んだ教材として提案することにした。

では，英語の基礎・基本とは何か。さまざまな答えが予想されるが，多くの人が一致するのは語彙と文型・文法である。ここでは，この 2 つを代表的な例として *NC* の基本的な考え方を紹介しておきたい。

① 語彙

語彙は非常に重要であり，コミュニケーション能力の要でもある。承知のように，中学校の教科書に載せる語彙は 900 語程度ということになっている。そのうちの 100 語が必修語である。そこで *18 NC* では学習の効果や活動のしやすさを考慮し，複数のコーパスを利用して 500 語を基本語として選定した。これが *NC* が考える語彙に関する基礎・基本ということになる。基本語は，話したり書いたりできることを目標とする語として，教科書に太字で示している。その他の語は，理解語と話題語に区別し，前者は読んだり聞いたりして理解できることを目標にする語として，並字で示している。後者は特定の題材との関連で理解できることを目標にしており，網掛けで日本語訳を付している。基本語の詳しい扱いについては，本誌特集の「生徒の語彙力を伸ばすために」を参照していただきたい。

② 文型・文法

中学校で扱うべき文型・文法は学習指導要領に明記されているが，その扱い方は教科書に任されている。*NC* は従来から文型・文法をその提示順序から付録の扱いにいたるまで重視してきた。文型・文法が基礎学力という観点で欠くことのできない要素だからである。コミュニケーション能力という点でも文法が重要であるということはすでに述べた通りである。そこで *18NC* では文型・文法をどのように扱っているかについて基本的な考えを説明しておきたい。

まず，学習指導要領に盛り込まれている文型をすべて同レベルで扱うことをしていない。それは基礎・基本という観点で効率的ではないからである。*NC* の選定・配列基準の 1 つは「学びやすさ・教えやすさ」である。特に週 3 時間のような限られた時間のなかでは学習は効率的に，しかも体系的に行われる必要がある。2 番目の基準は，「文法性」である。文法の基礎・基本は何かを考えたときに，文法を精選する，という考えに行き着く。たとえば，数，人称，三単現，助動詞，進行形，時制，完了形などは英語の文法の根幹をなすものである。このような基本的なものは，文法の POINT として出し，しっかりと学習してもらう。一方で，Where is ～？や When do you ～？などの文型は，一度 What is ～？のような WH 構文を学習したあとは，一種の表現として「使いながらの学習」に委ねることにしている（DO IT—TALK で扱っている）。言語習得理論によれば，学習には「体系学習」（system learning）と「項目学習」（item learning）があり，両者が有機的に統合して言語が習得されるという。*NC* の文型・文法の扱いは，このような言語習得理論も参考にしている。

3．*NEW CROWN* の活動と学びのスタイル

現在は教授法不在の時代であると言われる。確かに，多くの現場の先生方との交流を通して，多種多

様の授業観や教え方があること，そして教科書がさまざまな活用のされ方をしていることがわかる。そのようななかで，*18NC* の教科書構成の基本的な考え方として，以下の 2 点をあげることができる。1 つ目は，特定の教え方に縛られないことである。つまり，授業案がひとつしかできないような教科書では困るということである。先生方のティーチング・スタイルに合わせて柔軟に対応できる教科書でありたいと思う。2 つ目は，逆にどのように教えたらよいのかわからないような教科書でも困るということである。教科書は，基礎・基本から応用・発展的な活動にいたるまで，一定の教授理念・授業観に基づいて作成されている。したがって，教科書に沿って授業を行えば，一定の成果をあげることができる，つまり確実に基礎学力をつけることができるようになっていなければならない。*18NC* ではそれぞれの活動のねらいを視覚的にも明確にし，教科書に沿って授業を行えば基礎的な学習が確実に行われるように配置している。

以下では，基礎学力を育成するという観点から教科書のいくつかの活動を例にあげてその考え方を説明しておきたい。

① 基礎・基本を修得する活動と定着させる活動

18NC では「聞く活動から話す活動へ」という言語の基本的な学びのスタイルを重視している。その代表的な活動が各セクションの下に 4 つの絵をもとに展開される CHECK IT の活動である（p.5 参照）。ここでのポイントは基本文の意味がすべて「絵」で示されているということである。生徒はまずその絵を手がかりにして，聞こえる英語の意味を理解する（使用される単語はすべて既習語である）。次に，今度は耳で理解した構文を使って英文を口に出して言ってみる活動を行う。これはいわば「耳慣らし，口慣らし」の活動であり，ほぼ機械的に行われる活動である。ポイントは意味が「絵」で表されていることであり，それが日本語訳を介さずに理解したり表現したりする助けになるということである。英文を聞いたり読んだりして「わかる」ということは頭の中でその意味が「絵」のように描けることであり，英文を言ったり書いたりするときには，頭に浮かぶ「絵」を言葉にかえて表現することである。CHECK IT のような基礎的な活動であっても，これを積み重ねていけば，自己表現能力，コミュニケーション能力の育成に必ずつながっていく。

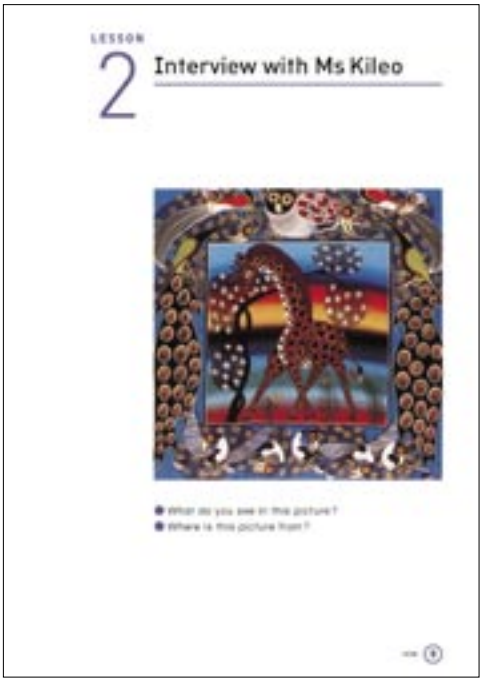
次に基本文を定着させる活動として USE IT を配置した。この活動は本課の最後のセクションの後に置かれている。ここでは CHECK IT ですでに基本文の基礎的な理解が得られているので，その基本文を用いてよりコミュニカティブな活動を行うことがねらいである。USE IT では，話す，聞く，書く，といったそれぞれの技能の修得に重点を置きながら，

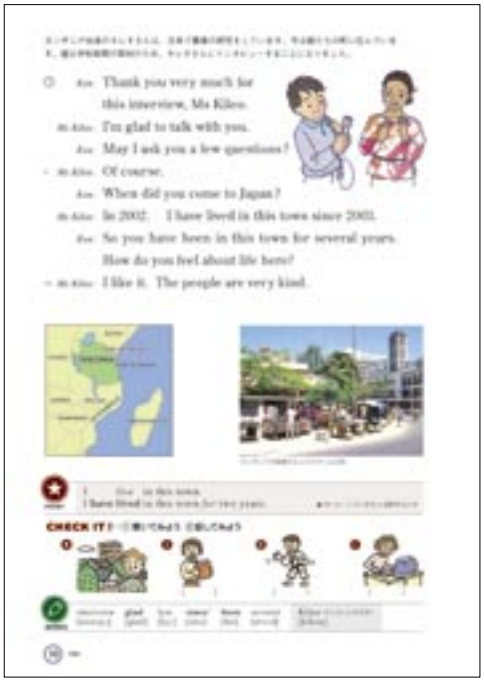
1）意味がある活動
2）インタラクションがある活動
3）自己表現がある活動

という 3 つの基本をもとに内容のある実践的な活動を用意している。

② 音声・音読を重視した活動

18NC では音声・音読能力を重要な基礎学力として位置づけている。「音」にかかわるスキルは，リスニングにおいても，スピーキングにおいても，大変重要である。音声の学習を集中的に行うのが，各課の USE IT の最後にある SOUNDS である。ここでは学年によって段階的・発展的に学習できることを意図してさまざまな活動を配置した（具体的な活動については，本誌特集の「気づきを重視する音声指導」を参照していただきたい）。また，音声指導の観点から本課の例文についても，当該ページの下段に音声アドバイスを設け，強勢，イントネーション，チャンク読みなど，随時発音上のアドバイスを行っている。また，暗誦・音読にふさわしい教材がほしいとの要望に応えて，音読練習を想定した題材も意図的に配置した。たとえば，2 年生の読み物教材である Zorba's Three Promises を見ていただきたい（p.12 参照）。この作品は第一義的には，感動的読み物，楽しい読み物，という位置づけであるが，そこには意図的に会話文を取り入れている。それぞれの発話の意味をよく理解し，気持ちを込めて音読することによって，物語の醍醐味がいっそう増すことになる。音読練習は，音と意味が一体であることを学ぶきわめて基礎的な，かつ重要な活動である。





③ 気づきを与え，考えさせる活動

学習は，教師が一方的に教えるだけでは成立しない。また，無味乾燥な言語の操作練習をするだけでも学んだことが定着しない。つまり，生徒に学習の動機を与えたり，学んだことのフィードバックを促すことが重要である。要は，生徒が主体的に学び，主体的に考えるような活動を提供することである。ここではそういう観点から 2 つの活動を紹介したい。

1 つは，各課の扉のページに配置された活動である。ほとんどが写真や絵と簡単な質問文で構成されている。私たちはこれを「プレ活動のページ」と呼んでいる。ここで主として意図していることは，生徒の興味関心を促し，題材に取り組む動機を与えることである。授業では，これを基にしてオーラル・イントロダクションを行ったり，生徒からさまざまな発話を引き出すための素材として活用することができる。また，すべての「プレ活動のページ」には 4，5 文からなるリスニング・スクリプトを用意しており，CD をかけるだけでも活動が成立するように工夫している。当然，リスニング力の育成にも効果的である。

もう 1 つは，各課の最後にある THINK ABOUT IT の活動である。ここではそれぞれの課で学んだことの要点をまとめたり，印象に残ったことを書き出したりすることを意図している。学習を振り返り，自分の言葉で整理したり，まとめたりする活動は，学習の定着という点でとても大切である。最近，書くことの学力が低下していることがあちこちで言われているが，少しずつ書かせることによって，書くことの表現力が育成されることを期待している。最近，英語力を養成するために注目されている活動に Journal writing があるが，THINK ABOUT IT もそれに類似した活動である。

4. 三位一体の教育：まとめにかえて

今もっとも重要なことは，未来を担う子どもたちによりよい教育を提供することである。そのひとつとして「基礎学力を保証する」というのが今回の提案であり約束である。教育は多くの人の支えと協力によって成り立つ。もっとも大切なのが教育の主体である子どもたち，次に重要なのが教育を直接行う教師，次に教科書や補助教材などの教育の素材を提供する裏方。私たちが授業を支えるサポーターとして「人づくり」の一端を担うことができ，*NEW CROWN* で学ぶ子どもたちが豊かな言語力を身につけ，国際性豊かな大人に成長してくれることを心から願っている。

特集 基礎学力の育成

文型・文法を聞いて話して学ぶ活動
—CHECK ITの紹介—

酒井英樹（信州大学）

1. はじめに

英語の基礎学力のひとつに，文型・文法の力がある。文型や文法のしくみを理解するだけでなく，実際にその文型や文法を含む英語を聞いたり読んだりしたときに理解できたり，その文型や文法を使って表現できる学力を身につける必要がある。2006（平成18）年度版 *NEW CROWN*（以下，*18NC*）の CHECK IT は，聞くことや話すことの反復練習を通して，このような学力を育成することを目指している。本稿では，CHECK IT の活動内容，基本的な考え方，指導手順の例を紹介する。

2. CHECK IT の活動内容

下の CHECK IT（2 年 LESSON2，be 動詞の過去形）を見ていただきたい。基本文は，Tom was busy yesterday. である。この基本文の文型・文法を練習する活動が CHECK IT であり，各セクションに設けられている。

CHECK IT では聞く活動と話す活動の 2 つが用意されている。「聞いてみよう」の活動では，生徒は英語を聞いて，英語の意味に合う絵を特定する。ここで使われる語彙は原則として既出である。リスニング・スクリプトと活動内容は次の通りである。

POINT　Tom was busy yesterday.
（基本文の内容を星印の絵で確認する。）
No.1　Amy was late yesterday.
（B の絵の下に 1 と書き込む。）
No.2　Miki was happy yesterday.
（A の絵の下に 2 と書き込む。）
No.3　Koji and Miki were busy yesterday.
（C の絵の下に 3 と書き込む。）

「話してみよう」の活動では，生徒は与えられたヒントを参考にして絵を見ながら英文を発話する。スクリプトと主な活動内容は次の通りである。

POINT　Tom was busy yesterday.
（生徒は基本文を繰り返す。）
A: Miki, Happy
（生徒は Miki was happy yesterday. と発話。）
Miki was happy yesterday.
（生徒は正解の文を繰り返す。）

同様に，B: Amy, late，C: Koji and Miki, busy というヒントが出されて，生徒は

Amy was late yesterday.
Koji and Miki were busy yesterday.

と発話する。

このように，聞く活動では基本文の文型や文法を使った英語を理解することが求められ，話す活動で

は基本文の文型や文法を使った英語を表現することが求められている。

3. CHECK IT の特徴と基本的な考え方

2 つの特徴を中心に，CHECK IT の基本的な考え方を紹介する。

(1) 聞く活動→話す活動という配列

十分なインプットがあって，はじめてアウトプットが可能になる。文型や文法を学んでいく過程においても，理解から表出へという展開が有効であろう。理解には英語の意味の理解と文型・文法のしくみの理解があることを考えると，文型や文法を含む英語の意味がわかる段階，インプットの中で文型や文法に気づいたり，文型や文法のしくみを理解する段階，その文型や文法を使いながら表現できる段階が考えられる。CHECK IT の活動は，この流れに対応している。

「聞いてみよう」の活動では，既習語彙が使用され，絵が提示されているため，新しい文型や文法を知らなくても，生徒は「聞いてみよう」の活動に取り組める。この活動では英語の意味の理解が焦点となる。英語の意味が理解できたら，どんな英語で表現されていたかという形式面にも注目させていきたい。そうすれば，活動の中で音声提示される英文は，基本文の文型・文法を使った例文として機能し，生徒に多くの例文を浴びせることができる。

「話してみよう」は，ヒントが与えられ，聞く活動ですでに聞いている英文を自分で組み立てていく活動である。この活動の中でどのように英語で表現されていたかという点に生徒の意識が向く。そして自分で発話をした後に，正解の英文を聞く。この繰り返しによって，文型や文法のしくみの理解を深めていったり，表現する練習を行ったりする。

このように，生徒は文型や文法のしくみを理解するだけでなく，理解や表出の両面で使用できるようにする基本的な練習を行うことになる。

(2) 意味と形式(form)をつなげる活動

14NC（現行版）では LET'S COMMUNICATE にドリル的な活動とコミュニカティブな活動が混在していた。*18NC* では，意味を重視したコミュニケーション活動である USE IT とは別に，基本文の定着のための CHECK IT が各セクションに位置づけられている。

CHECK IT の主な目的は，意味と形式（form）を一致させることである。USE IT と比べて形式重視の活動であるといえるが，絵とヒントを手かがりに表現させることによって，意味をないがしろにした機械的な文型練習（パターンプラクティス）にならないように配慮されている。絵の意味を考えながら表現していくことが重要であり，最初のうちは流暢に発話できる必要はない。

4. CHECK IT の指導手順の例

先述の CHECK IT を使いながら，指導手順の例を示す。まず，基本文 Tom was busy yesterday. を導入した後で，CHECK IT の「聞いてみよう」の活動を行う。英語を聞かせ，指示通りに課題を行わせる。その後で，どんな英語が用いられていたかという点に注目させるために，Look at B. Amy ran to school yesterday. Which can you hear, “Amy is late yesterday” or “Amy was late yesterday”? と質問して，もう一度英語を聞かせるとよい。

次に CHECK IT の「話してみよう」の活動を行う。指示通り，ヒントを参考にして発話させる。発話させた後，正解文が放送されるので，自分が発話した英語と同じだったか確認させる。絵を見ながら，英文の発音練習を繰り返させる。

発展的な活動として，表現した英語を文字で書かせたりすることもできる。CHECK IT は，絵と音声による構成となっており，文字による文の提示はなされていない。基本文が CHECK IT と連動しているので，POINT の欄に書かれた基本文を参考にして書く練習をさせることができる。

5. おわりに

文型・文法の力は，コミュニケーション能力にとって欠けてはならない力である。CHECK IT を通して，この基礎的な力の育成を目指していきたい。そして，文型・文法の学習にとどまらずに，よりコミュニカティブな活動に取り組ませていきたい。

特集 基礎学力の育成

生徒の語彙力を伸ばすために

日臺滋之（東京学芸大学附属世田谷中学校）

はじめに

中学校学習指導要領外国語編[1]では，3年間に指導する語として「別表1に示す語を含めて，900語程度までの語（季節，月，曜日，時間，天気，数（序数を含む），家族などの日常生活にかかわる基本的な語を含む）」としています。このような制限のあるなかで質の高い題材を提供することを考えると，教科書のように限られたページでは語彙を精選し，盛り込み方に工夫を凝らす必要があります。

1. 語彙の精選について

語彙を精選するにあたって，2006（平成18）年度 *NEW CROWN*（*18NC*）では，右記の表1にあるwordlistといくつかのコーパスから語を抽出し，「必修語100（学習指導要領の「別表1」の語）」と，「2002（平成14）年度版の主要教科書に共通の基本語」とを参考に，*18NC*の基本語として500語を精選しました。

2. *NEW CROWN*の語彙構成

*18 NC*は，「基本語」，「理解語」，「話題語」，そして選択的な扱いとしての「WORD BANK」の語彙から構成されています。

基本語は，表1のwordlistや複数のコーパスから抽出した最も活用度の高い500語で，生徒が話したり，書いたりすることができることを目標とする語です。教科書の下欄のWORDSに太字で示してあります。学習指導要領の「別表1」の100語にはさらに単語の右肩に＊を付してあります。

理解語は，基本語500の次に重要な語で，教科書の題材との関連で必要な語で，生徒が読んだり聞いたりして理解できることを目標とする語です。教科書の下欄のWORDSに並字で示してあります。

表1　7つのコーパスとその概要

COB3[2]：COBUILD3の5bandsの語彙（680語）。

LDOCE3[3]：s1（話し言葉における使用頻度上位1000語）。

LDOCE3[4]：w1（書き言葉における使用頻度上位1000語）。

H10CS[5]：学習指導要領「別表1」の語，季節，月，曜日，時間，天気，数（序数含む），家族。（186語）

主要教科書コーパス：主要教科書のどれかに出現する語彙（listening scriptも含む）。

英検コーパス：英検5級，4級，3級のコーパスのどれかに出現する語彙。

中学生の学習者コーパス：スキット，日本文化紹介，スピーチからなる学習者コーパスのどれかに出現する語彙。

WORDSの語彙表示の工夫（BOOK 3, LESSON 2, Section 1）

glad, beenは基本語。sinceは基本語で「別表1」の語。interview, few, severalは理解語。Kileoは話題語。

話題語は，特定の題材との関連のなかで理解することを目標とする語です。例えば，人名・地名などの固有名詞が含まれます。教科書の下欄の WORDS にグレーの網掛けで示し，その意味を付してあります。

なお，「基本語」と「理解語」，および「話題語」の一部の語が学習指導要領でカウントされる 900 語となっています。

WORD BANK では，選択的な扱いとして，活動を行う際に参考となる語句や表現をまとめたコラムで，「中学生の学習者コーパス」から使用頻度の高い表現を盛り込んであります。

3. 語彙力を伸ばすために

① WORDS の表示を指導や学習の道しるべに

語彙の区分が明示されることにより，どの語はどの段階まで指導すればよいのか目安になりますし，生徒にとってはどの語から優先的に覚えていったらよいのかという道しるべになります。

例えば，実際の授業では，以下のように教科書の本文から基本語の部分をブランクにしたハンドアウトを用意します。

本文の音読練習後，2 人 1 組になり，一方は教科書を持ち，他方はハンドアウトを見ながら空欄に語を補いながら読みます。空欄の語を補って読めない場合は教科書を持っている生徒が助けてあげます。

また，このハンドアウトは前時の復習として空欄に語を補って書くタスクにも使えます。

BOOK 2, LESSON 1, Section 1

―基本語を空欄にしたハンドアウトの例

Hello, everyone.
Let me tell you about my (　　) in Australia. In Australia, I lived in Sydney. I (　　) (　　)! I played netball every Saturday. It is popular (　　) my friends.

It is spring in Japan. It is autumn in Australia. The season is (　　). (　　)? Does (　　) know?

このハンドアウトから話題語（網掛けの語）も空欄にすれば，さらに難易度があがります。このようにして語彙の定着に役立てることができます。

② 表現活動に役立つ WORD BANK の語彙

各学年の DO IT の TRY の項目は選択的な活動であり，生徒が自分の視点に引き寄せて表現できる内容であり，インタラクティブな活動です。TRY には，WORD BANK が用意されており，生徒の表現活動をサポートします。具体例を見てみましょう。

下の TRY の対話では，B: How do you go there? の質問に対して，WORD BANK から生徒が各自の実際の経験にもとづいて，「行き方」について語句を選択し，以下の下線部のように答えることができます。

I go there <u>by train [bus, car, bike, ship].</u>

I go there <u>on foot</u>.

BOOK 2, DO IT―TALK 2 の TRY

WORD BANK は DO IT だけではなく，USE IT や WORD CORNER にも埋め込まれています。

③ WORD CORNER で関連のある語をまとめて整理

WORD CORNER では，ばらばらに学習するよりも，まとめて学習したほうが身につきやすい語をまとめて提示し，活動しながら身につけるように工夫してあります。各学年で扱ったトピックは次のとおりです。

1年：数字，家族，曜日，月，序数，四季
2年：体の部分，天気，色，つなぐことば，場所の表し方
3年：感情や体調を表す表現，いろいろな数の表し方，単語の仲間

WORD CORNER のタスクの構成としては，「聞く」→「話す」→「使ってみる」という流れになっています。この指導の手順を踏みながら語彙の定着を図っていきます。

まず，生徒に絵の状況を説明します。最初の絵であれば，「女の子がバス停のところに立っている状況を表すには，A girl is standing at the bus stop. と言い，場所の表し方として at the bus stop を使うよ」という程度の説明にします。

1番のタスクでは，音声を聞いて，場所の表し方を言ってみます。文字を見ないで，絵だけ見て，場所の表し方がスラスラ言えるようになるまで繰り返し練習したいものです。

2番のタスクでは，絵を見ながら，場所の表し方の表現を実際に使って書く活動を行います。

BOOK 2

④「単語の意味を調べよう」を活用して自立した学習へ

生徒が自分で辞書を引き，あいまいな知識を確かめていく過程は語彙の習得に役立つばかりでなく，自立した学習者を育てていくうえでとても大切に思います。

2年生の「単語の意味を調べよう」では，LESSON 2, Section1 の新出単語の意味を，巻末の「単語の意味」を使って調べる例が載せてあります。LESSON 2, Section1 を学習する時点で活用すると効果的です。

3年生の「辞書を使って単語の意味を調べよう」では，実際に辞書を使って調べる例が載せてあります。こうした指導を踏まえて，ノートや単語カードに単語の整理をしていく習慣を，生徒に身につけさせていきたいものです。

BOOK 3

さいごに

18NC は語彙を精選し，学習者に基礎・基本が定着しやすいように語彙を盛り込む工夫をしています。うまく使いこなして生徒の学習に役立てたいものです。

［参考文献］

1），5） 文部科学省『中学校学習指導要領（平成 10 年 12 月）解説—外国語編—』東京書籍，1999，pp.37-38，pp.89-90
2） *Collins Cobuild English Dictionary for Advanced Learners.* 2001. Harper Collins.
3），4） *Longman Dictionary of Contemporary English (LDOCE) Third Edition.* 1995. Longman.

TAKAHASHI SADAO
SAKAI HIDEKI
HIDAI SHIGEYUKI
MORI CHIZURU
TANABE YUJI

特集 基礎学力の育成

4技能のバランス

森 千鶴（福岡教育大学）

SPECIAL

はじめに

「コミュニケーション能力の育成」と聞くと，誰しもまず,「聞くこと,話すこと」を思い浮かべます。しかし,今や世界はインターネットでつながり,ネットサーフィンでは英語を「読むこと」が中心となります。また e-mail でのやりとりは,「書くこと」でなされます。その意味では,「読むこと，書くこと」の必要性は一昔前よりも高まっているともいえます。

また，中学校の教育現場で課題とされている「基礎･基本の定着」においても,「読むこと･書くこと」は不可欠です。つまり昨今の社会状況や，教育を取り巻く課題を考慮に入れると，学校教育の中の英語教育においては，4技能をバランスよく取り入れて指導することが重要であるといえます。

1.「基礎・基本の定着」と4技能

伊東（1999）は，学習を「わかるための学習」と「慣れるための学習」に分類しています。「わかるための学習」とは基本文型と語彙の理解と定着をさしており,「慣れるための学習」とは自己表現につながる表現方法に慣れることを示しています。そして，学校教育においては，まず「わかるための学習」が必要であるとして，この段階における4技能の統合を提唱しています。つまり,新教材を「聞く・話す」で導入し,「読む・書く」で定着させる，ということです。

2006（平成18）年度版 *NEW CROWN*（*18NC*）は，一貫して「わかるための学習」に留意しています。学習指導要領の示唆に従って，1年から3年まで，新教材の導入は会話形式が多く，次に続く練習も「聞く・話す」が主体です。しかし，それと同時に1年生のきわめて早い時期に，文字導入（「単語･文の書き方」）が紹介されており,定着のための「書くこと」へ結びつけることができます。また，それぞれの LESSON の最後にある THINK ABOUT IT では，本文内容に関係のある簡単なライティングも取り上げられており（たとえば，1年 LESSON 6 では「ミオについてあなたが印象に残ったことはどんなことですか。このレッスンの英文から抜き出してみよう。」），基礎の定着を確実にすることが意図されています。それにより，自己表現活動としてのライティングへの橋渡しにもなっています。

2. 読むこと

ところで,「自己表現力」を身につけさせる指導において非常に大切な前提は，表現したい「内容」があるということです。そこで,まず教科書の中に,感動を呼んだり，考えさせたりする，深い内容のある題材や読み物が提供されているかどうかが重要になります。そして学習者の側には，その題材や読み物の内容を正しく理解することが求められます。

NEW CROWN は従来から聞く，話すだけではなく，題材そのものや，読むこと，書くことを重視してきましたが，*18NC* においてもその方針には変わりはなく，意味深い内容をもつ読み物（LET'S READ）を提供しています。また，従来の LET'S READ の Reading Point 1，Reading Point 2 はそれぞれ，Pre-Reading，Post-Reading として整理されています。特に Pre-Reading は，これから読む内容の予測を促すことで,「読みのプロセス」のトップダウン・プロセスを活性化させ，さらに読み方の理想とされるインターラクティブ・プロセスへとつ

LET'S READ 2

Zorba's Three Promises

PRE-READING

A gull landed next to Zorba.
"Help me," the gull cried. "I'm covered with oil. I'm dying."
"What can I do?"
"Soon I'll lay an egg. Promise me three things. Please don't eat it."
"OK," Zorba said. "I won't."
"Please take care of the egg."
"OK. I will."
"And please teach flying to my baby."
"Me?"
"Yes, you."
"OK. I'll try."
"Thank you," the gull said.
She soon died. Under her body was an egg.

READING WRITE

DO IT!

WRITE 2

カードを書こう

Dear Mike,
Thank you for your card.
I had a good winter vacation. ● I went to Hokkaido with my family. ● I skied every day. ● I enjoyed it very much.
What did you do in your winter vacation?
Sincerely,
Aki

ながるよう工夫されています。

たとえば，2年生のLET'S READ 2 “Zorba's Three Promises” を例にとってみましょう。Pre-Readingの2つの質問や挿絵によって，生徒はまず「この話は猫とカモメの話らしい」と予測をたてます。次に①，②の答えを見つけようとして，目的をもって読みます（トップダウン・プロセス）。実際に読むときには，単語や文法にも注意を払うことになりますが（ボトムアップ・プロセス），そのことに気をとられすぎることなく，目的に向けて楽しみながら読み進めます。これこそ,読み方の理想とされる「インターラクティブ・プロセス」の実現です。

3. 書くこと

「書くこと」をひとつの技能ととらえた場合,「まとまりのある内容」を書けるようになることが求められます。つまり，パラグラフ単位でのライティングです。しかし，このことは，パラグラフ構成力も必要とされるので，中学生には高度な作業であるといえます。*18NC* の DO IT—WRITE では，そのパラグラフ構成を無理なく理解させるために，それぞれモデル・パラグラフが示され，STEP 1，STEP 2 と段階を踏んで，書くことに取り組めるよう工夫されています。

たとえば，1年生の DO IT—WRITE 2（「カードを書こう」）を見てみましょう。モデル文の提示によって，生徒は下線部分の文法構造（過去形）を見直して自分なりに理解し，書くことに取り組むことになります。基礎的な文法項目を，WORD BANK を利用しながら，一文，一文，書くことで復習することができ，また自分の冬休みの体験について書くので，自己表現の楽しさも味わえます。さらにパラグラフ・ライティングの基礎も学べます。

まとめ

以上見てきたように，*18NC* は，教科書にそのまま沿って授業しても，4技能が無理なく取り込まれるように工夫されています。特に,「基礎・基本」の定着に留意して,「読む・書く」活動も従来どおり重視しているところが大変に特徴的であり，注目すべき点であるといえます。

〔参考文献〕
伊東治己（1999）『コミュニケーションのための4技能の指導』教育出版

特集 基礎学力の育成

気づきを重視する音声指導

田邉祐司（専修大学）

はじめに

変容する英語の社会的な役割やそれにともなう言語教育理論の変遷は音声指導のあり方にも変化をもたらしました。海外では伝統的指導法の「見直し論」が起き，その内容・方法などの刷新がはかられました。しかし日本の現状はどうなのでしょうか。「実践的コミュニケーション能力」という理念と実践の間にはギャップが存在し，胸をはって十分だとはいえないのが偽らざるところでしょう。

2006（平成 18 年）度改訂の *NEW CROWN*（以下，*18NC*）はこの問題に真摯に取り組みました。最新の理論を取り入れ，日本の指導現場の現状をふまえた音声能力の育成方法――それは基礎学力の養成でもあります――をめぐって討議を重ねてきました。その結果，新しい考え方を，全面的ではありませんが，SOUNDS,「サウンド・アドバイス」などに盛り込むことになりました。ここではそのエッセンスをお伝えします。

見直し論

一般に音声指導法は，習慣形成的な反復中心の手法（例：listen & repeat，音読）と教師の音声学的解説による分析的な手法（例：発音口腔図，発音記号）に大別できます。しかし，近年の音声能力不足に起因するコミュニケーション障害の事例や音声習得研究のデータは，こうした伝統型への疑問を投げかけています。伝統型の問題は，何よりも機械的で「心ここにあらず」の練習と音声知識の注入の傾向が強い「教師中心･学習者受け身」的な指導となり，その結果，本当の「音声基礎学力」が身につかないことです。

といっても伝統型を全面的に否定するわけではありません。その「良さ」は残しながらも，目標とする音声能力を身につけるには，どこを，どう改善すべきか，というのが見直し論の出発点です。

言語事実をそのままルールとして説明し，繰り返し練習をさせ，後は生徒にゆだねる「P-P-P 型」（提示ー説明ー練習，presentation-practice-production）ではこれまでと同じ。それだけではなく生徒自身が気づき・発見（awareness & discovery）できるような相互活動（interaction）を仕掛け，それを足がかりにして，項目を主体的に学ばせる手法を併用してみようというのが見直し論の方法論上の中核です。

NEW CROWN の具体例

18NC には生徒がお互いに助け合いながら発音やリスニングのコツをつかめるような工夫を適宜，盛り込みました。以下，教科書を用いた活動例を紹介します。

［つづりと発音］

つづりと発音の関係を教えるには様々な方法があります。しかし伝統型では，やはり教師が教え込む傾向があります。もちろんそれも時には必要ですが，考えない，気づかない生徒を生み出してきたことも事実です。

a, e, i, o, u の読み方に注意しながら，次の単語を下の図の同じ仲間のところに書き入れてみよう。

sit, go, eat, catch, cup, nice

a	cat（　　）	name（　　）
e	pencil（　　）	easy（　　）
i	six（　　）	like（　　）　（以下略）

18NC では以上のようなタスクを与え，生徒に相互・協同活動を通して，彼ら自身に考えさせ，背後に働くルールを発見させる試みを取り入れます。Listen & repeat や音読は，このようなタスクの後に組み込むと一層効果があります。

［音節の違い］

英語らしい発音を習得するには，日本語の拍（モーラ）と英語の音節（シラブル）の知識が必要となります。次はそのための気づきをうながす手法です。

> 次の日本語の，音のまとまりの数を数えて（　）に入れてみよう。次に，英語のほうを数えて（　）に入れ，日本語と比べてみよう。
> 例　フラワー（フ・ラ・ワー）（3）
> flower（flow・er）（2）
> カメラ（　）
> camera（cam・er・a）（　）　（以下略）

ここでも，はじめから教師が構造の違いを教え込むのではなく，生徒に考えさせるプロセスを大切にします。

［英語のリズム］

英語のリズム・パターンの指導でも，発見・協同学習が応用できます。次の例は単語のリズムが文にもあることをつかませるものです。

> 左の単語と同じリズムをもつ文を右の中から探して，線で結んでみよう。次に，単語と同じ速さで文を発音するにはどうしたらいいか考えてみよう。
>
> | | |
> |---|---|
> | prob・lem ・ | ・She likes it. |
> | Ja・pan ・ | ・He's Paul. |
> | Sep・tem・ber ・ | ・Thank you. |

［音読］

音読は語学学習の要諦です。しかし形式・儀式的になってしまうと効果は期待できません。次はペアで生徒の一人が音読したものを，もう一人ができるだけ教科書を見ないで，相手の発音をたよりにリピート（シャドウ）するペア音読練習です。

> 意味の切れ目ごとにまとめると，発音がしやすくなります。次の文を意味の切れ目ごとに区切ってみよう。次にペアになり，相手が区切りごとに言うことをくり返して言ってみよう。最後には 1 文を通して言ってみよう。
> Many animals have no homes in the wild.

このバリエーションをもうひとつ。「Backward Build -up ペア音読」です。

> ペアで発音練習しよう。1 人が読みながら文の最後から少しずつ発音していきます。もう 1 人は教科書を見ずにくり返してみよう。
> sign language
> learning sign language
> you're learning sign language
> why you're learning sign language
> I know why you're learning sign language.

［サウンド・アドバイス］

の箇所は音声学習を助けるひと言ですが，ここにも新しい考え方が盛り込まれています。

> 強く読むところを考えて，リズムよく読んでみよう。

> It is honey! の is は強く発音しよう。また，なぜ強く発音するか考えてみよう。

おわりに

音声指導では時として「学びの主体」である生徒に考えさせ，相互活動を通して，そこから彼ら自身が何かを気づき・発見するという「学びの原点」を奪ってしまう傾向がありました。*18NC* はそのような原点——気づきと発見の連続——を重視した中学校検定教科書としては初めての「試みの本」と総括できます。

平成18年度版 *NEW CROWN ENGLISH SERIES* 指導書のご案内

平成18年度版 *NEW CROWN ENGLISH SERIES* の教科書をより良くお使いいただくために，次のような教師用指導書（各学年6分冊）を用意し，授業のサポートをいたします。

① 指導・評価編

指導計画・評価計画にこの一冊

指導と評価の一体化を実現するための資料として，従来の授業案集や評価資料から一歩踏み出した構成になっています。
年間の指導計画に沿った各課の指導目標が，対応する評価規準とあわせて示されており，評価の具体的方法の例，ABCの判定を行う上で参考となる基準の例，さらには「努力を要する」（C基準）と判定された生徒にはどのような支援をしたらよいかに至るまで，一貫した具体例が示されています。セクションごとの授業案も入っていますので，あわせて活用すれば，授業の計画は万全です。

② 解説・活用編

授業・教科書の準備のためのレファレンス

各課・セクションのねらい，題材，言語材料，言語活動，語句・表現など，教科書のすべてにわたって詳細な解説を施し，発展的な使用例も掲載。ていねいな「題材の背景的知識」「新出文型・文法の導入例」「オーラルイントロダクションの例」「語句・表現の解説」のほか，新しく設けた「プレ活動の例」「CHECK IT の発話例」についても解説しています。

③ Team-Teaching Manual

ALTとのT-Tや，All Englishで行う授業の参考に

教科書で扱っている題材および言語材料について英語で解説をし，活動例をつけたものです。主にALTのための指導用資料として，またALTとのTeam-Teachingを進める際の日本人教師の参考資料としてもお使いいただけるように作成いたしました。題材の背景的知識やその資料は「② 解説・指導編」を単に英訳したものではなく，ALT用に作成しています。また，具体的な授業案も英語で掲載していますので，All Englishでの指導や教案作成の参考としても利用していただけます。

④ ワークシート集（言語材料編・題材編）

コピーしてそのまま使える，言語活動ワークシート集

言語材料を中心とした活動，題材に焦点を当てた活動の両面から，授業における活動を活発にするためのワークシート集として作成いたしました。
言語材料編……各レッスンのセクションごとに，言語材料に重点を置いたリスニング問題と，スピーキングまたはライティングの活動が短時間でできるワークシート。
題材編……教科書の題材に関連した活動を中心に，ターゲットとなる言語材料もあわせて学習できるようにしています。

⑤ Teacher's Book

教師用指導書のエッセンスを一冊に

授業に必要な「背景的知識」「ねらい」「注意すべき単語・語法・文法・音声の解説」「リスニング・スクリプト」「Q&A」などが，教科書の印刷面とともにコンパクトに収められています。この一冊に授業

に必要なエッセンスが網羅されています。

⑥-1　音声 CD

教科書とワークシート集のリスニング音声

プレ活動のリスニング音声，CHECK IT の音声，USE IT のリスニング問題, DO IT—LISTEN の音声，SOUNDS の音声，Teacher's Manual ④ワークシート集「言語材料編」のリスニング問題の音声などを収録。

⑥-2　指導用 CD-ROM

授業計画やテスト問題作成に！
大変便利なデータ集

教科書本文のテキストデータ，新出語のデータベース，CHECK IT のスクリプト，USE IT のワークシート用データ，セクションごとの単語テスト小問題，レッスンの補充問題，年間指導計画表などを収録。テスト問題やワークシート作成，授業研究のための資料などにご利用いただけます。

●指導用教材

指導用 CD（テキスト付き）
教科書完全準拠の音声 CD。T-F，Q&A など各種のテスト問題の音声も収録。

ピクチャーカード
教科書の場面を追加のイラストや写真とともに大型のカードに。導入や発展など多様に利用できるピクチャーカード。

フラッシュカード
新出の全単語・句を収録。カード裏には日本語訳を収録予定。

ビデオソフト
教科書の場面を映像再現したものと，題材の理解を深める資料映像部分の 2 部構成。

DVD ソフト
ビデオソフトの DVD 版。

CD-ROM ソフト
音声認識機能で発音練習を可能にした，教科書準拠の英語学習ソフト（Windows 対応）。授業での使いやすさを追求。

投影用デジタル教材（予定）
授業に必要な指導用教材を一体化。電子情報ボードやスクリーンに投影し，授業を効率化できるコンピュータ・ソフト。

アクティビティ・アイディア集
言語材料ごとに，コミュニケーション活動を活性化するための多彩なアクティビティを収録。解説＋ワークシートで構成。すぐに使えるワークシート形式で，生徒が楽しく活動に参加でき，コミュニケーション能力の育成に効果的な指導用教材です。コミュニケーション活動の補充用としてご好評をいただいています。

▲アクティビティ・アイディア集見本ページ

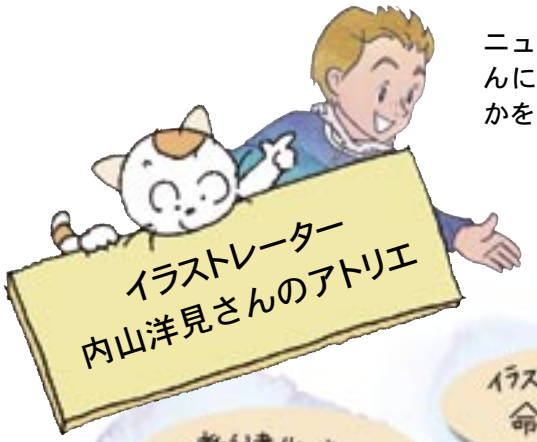
●その他のサポート

TEACHING ENGLISH NOW
英語教育の今をとらえる総合情報誌。最新の話題と授業のアイディアを満載。

授業通信
全国各地の授業実践を紹介。

NEW CROWN ホームページ
上記の冊子や各種資料，リンク集，付属教材の紹介，研究会の案内など役立つ情報を満載。

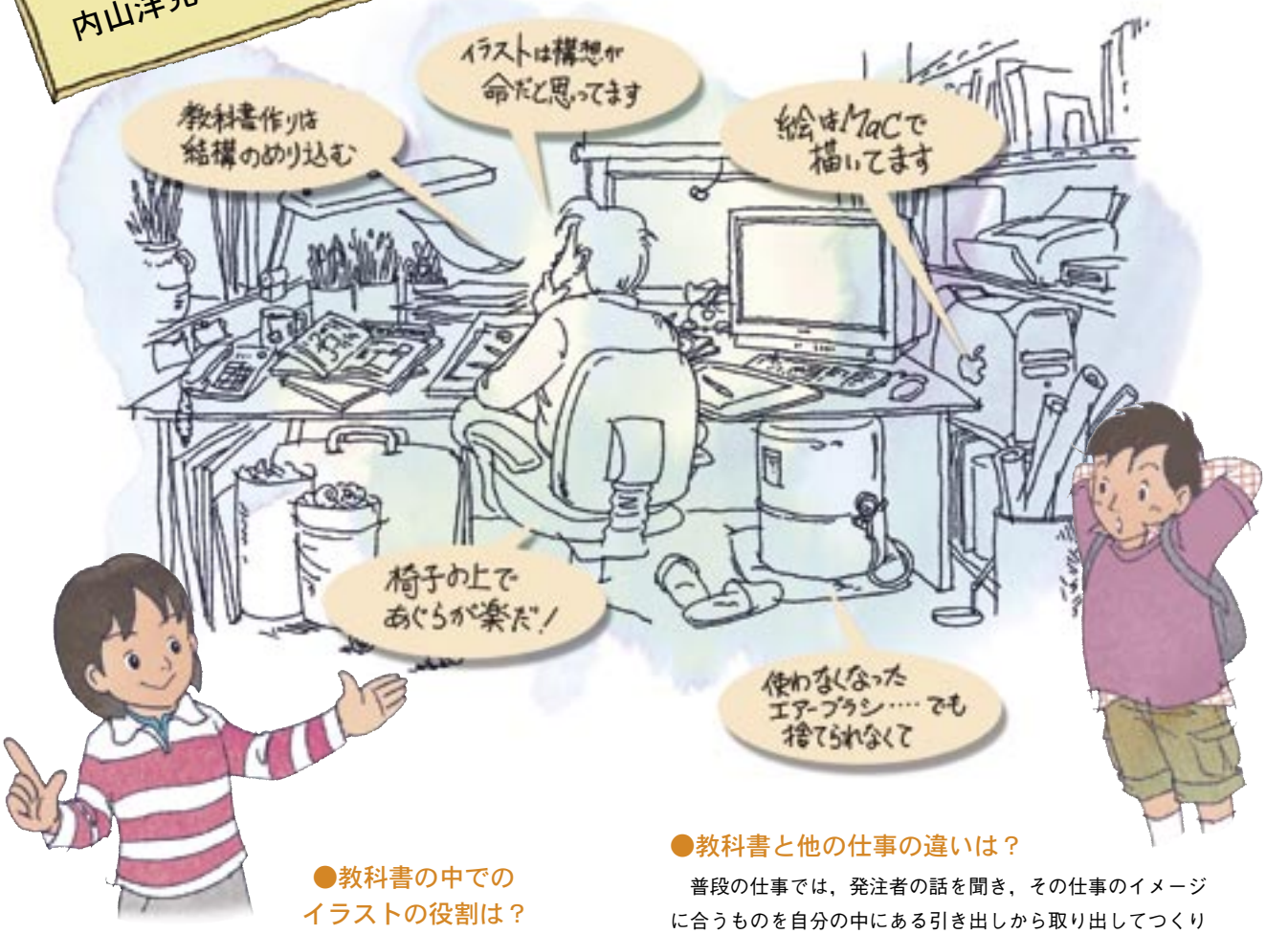
ワークシート類
言語活動用，読解用，入試演習用など，授業ですぐに使えるワークシート類を提供。



ニュークラウンの本文部分のイラストを担当している内山洋見さんに，どのようなことを考えながら教科書の仕事をされているのかをお尋ねしました。

●教科書の絵は挿絵？　イラスト？

「挿絵」という言い方には古めかしさがあるのでしょうか？　私は嫌いではないのですが…。一方，「イラスト」には自己主張や個性というような響きも感じられます。教科書の絵は，個性という点ではその２つの間にあるような気がします。



●教科書の中での イラストの役割は？

私は子どもの頃，挿絵のある本が好きでした。まず絵を先に見てしまってから，文章を読んでいくことが多かったように思います。主人公の絵がカッコイイと嬉しくて興奮。しかし，お粗末な絵のときは読む気力もなえてしまいました。ビジュアルは大事！

ニュークラウンのキャラクターたちは，３年間生徒たちと一緒に成長し，多くのことを学んで大人への階段をのぼっていきます。生徒たちのクラスメイトのような感覚で，３年間をともに過ごすのです。また，中学校教科書の少ない分量の英語では表現しきれないことを，イラストで語ることも求められます。教科書は，まさに本文とビジュアルの一体化を重視したつくりになっているのです。そういう意味で，本文のイラストは，今風とか洒落たイラストではその役割を果たすことはできません。今回のイラストも様々な試行錯誤の末に生まれました。

●教科書と他の仕事の違いは？

普段の仕事では，発注者の話を聞き，その仕事のイメージに合うものを自分の中にある引き出しから取り出してつくりあげます。要するに，自分のオリジナルを売りものにするわけです。教科書の場合は違います。編集委員，編集者とのやりとりのなか，長い過程を経てようやくできあがります。できあがったキャラクターは，イラストレーターのオリジナル作品というより，ニュークラウンのオリジナルキャラクターとなるわけです。自己主張を売りにしている作家としては，つらい面もあるのは事実です。しかし，そのキャラクターに感情移入しながら様々な場面を展開していくのは，結構楽しい作業です。自分の世界だけでパフォーマンスするならアマチュアでもできますが，多くの人たちの要求に応えるのがプロ。ましてや，この本で学習する生徒たちの目線で構想を練り，また，教材としてのイラストの存在意義を考えると，この仕事の奥は深い！　どっぷりのめり込んで，初めておもしろさが見えてくるのではないでしょうか。